子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈5〉
－平成20年度実施プログラム－

若杉雅夫・三羽佐和子・松尾良克・伊藤 功子・長谷部和子
篠田美里・杉山喜美恵・生嶌亜樹子※　　（幼児教育）

はじめに

「親育ち子育ち､学生の心の育成」をテーマに、平成16年度後期に開設した子育て支援活動「あそびの森」も、本年度で足掛け５年目となる。この間、5000人近い地域の親子に遊びのプログラムを提供することができた。また、参加者数も年々増加傾向を示している。

このことは､「あそびの森」が着実に、地域社会に根を下ろしつつあるとともに、その理念(親子で共にさまざまな遊びを体験する機会と場を提供し､互いに心を通わせ､共に育つ)を共通テーマとして取り組んだことが、保護者の理解と共感を得たためであろう。さらに、子どもたちが友だちとのびのびと遊べる場を保護者が求めているというニーズに合致した点も挙げられる。

学生にとっても「あそびの森」の実施プロセスの中での学びは、主体性や積極性を育むと共に、実習ではなかなか接することができない、親子の触れ合いの場や、親の話を聞くことができ、保育者としての総合的なスキルを培う貴重な機会と場となっている。現在では「あそびの森」の活動は､本専攻の教育の大きな特色となっている。

教員の研究活動から捉えても、この五年間で研究論文４件、活動報告文４件、学会発表６件と､「あそびの森」の取り組みを核として、大いに活性化している。地域貢献から出発したこの取り組みの５年間の成果を振り返るに、単に子育て支援活動のみならず、学生の保育マインドの育成と教員の成長、そして、大学全体の活性化に大きなプラス要因を与えていると考える。今後もこの活動を毎年、継続的に実施することによって、学生、教員ともどもさらなる成長を期したい。

※愛知教育大学

今年度は、この５年間で得た、さまざまなことがらを、一つ一つ確かめながら、より確かなものにしていくことを目標とするとともに、学生の主体性を昨年以上に前面に押し出すため、各教員がプログラムの意義をはっきりさせ、準備段階からの学生の積極的な参加を促した。

あそびの森プログラム

＜月例プログラム＞

① スタンプ遊びで大変身
　５月24日　　若杉　雅夫
② スライムなどで感触遊びを楽しもう
　６月21日　　三羽　佐和子
③ くまのプーさんを作りましょう・懇話会
　７月12日　　篠田　美里
④ 親子で遊ぼう「はいるかなぁ？」
　８月30日　　伊藤　功子
⑤ 英語のカルタ取り
　９月20日　　長谷部　和子
⑥ わらべうたでリトミック遊びをしましょう
　10月11日　　篠田　美里
⑦ 親子で作るペーパークラフト
　11月29日　　松尾　良克
⑧ クリスマス会
　12月20日　　三羽　佐和子
⑨ 粘土遊びでクッキー作り
　１月24日　　若杉　雅夫
⑩ おねえさんと遊ぼう・子育て懇話会
　２月14日　　杉山　喜美恵、生嶌　亜樹子

＜その他のプログラム＞

　長谷部　和子　　杉山　喜美恵
① 手作りおもちゃで遊ぼう　11月26日
②③ 児童センターとの連携プログラム
　12月10・17日　２月25日
④⑤⑥ ブラジル人親子対象
　「ちょっと早いクリスマス」12/8
　「日本のお正月」1/18 「節分」2/8

Ⅰ　活動報告

1　前期プログラム（5月～9月）

プログラム№①　「スタンプ遊びで大変身」
（H 20 年度オープニングプログラム）
実 施 日　H 20 年 5 月 24 日（土）
10:00 ～ 11:45　13:30 ～ 15:15
ね ら い
・いつも見慣れている形をスタンピングすることで違った側面を見出し、生活の中にある様々なものに対する興味や関心を高め感受性を育てる（廃材が造形表現の素材となることを知る）。
・家族の手形を取り、互いの絆を再認識する。
・何度もいろいろな色でスタンピングすることで、色や形の面白さを楽しむ。
・スタンピングで遊んだ紙をプリント生地に見立てて服や帽子、ネクタイなどを作り、柔軟性や工夫する力を培い、遊び心も育む。
担 当 者　若杉　雅夫
参加人数　131 名　参加家族 43 組　保護者 53 名
（父親８名.祖父母３名 / 子ども 78 名）
※参加人数は午前・午後のトータル
手伝った人数および担当
教員：４名 学生：30 名
担当内訳 (案内・受付・託児・あそびの支援)

図１. 家族の手形

内　　容
活動の前に、学生が手遊びで子どもの注意を惹きつけ､気持ちをリラックスさせた。その後、スタンプ遊びについて簡単に説明し、スタンプ台やスタンプする素材、全紙大の白い模造紙を各家族に一セット配り活動に入った｡参加者は、色を変え形を変えて、思い思いにスタンピングを十分に楽しんだ。

スタンプした紙は、丸や四角・三角・花模様などのカラフルな色合いの形が軽妙に折り重なり、可愛らしい、素敵なプリント生地になった。

図２. スタンプ模様の服・帽子

スタンピングを十分に楽しんだ後、乾燥のため一旦その紙を片付け、八つ切りの画用紙と同じ大きさの黒の色画用紙を配布し、家族の手形遊びを楽しんだ。お父さんの手､お母さんの手、子どもの手が仲よく画用紙に並んだのを見て、改めて家族の絆を感じることができたのではないかと考える。はさみで手形の紙の端を切り整え、黒の色画用紙の上に貼って、きれいに額装し､「あそびの森」の大切な記念とした。

最後は、スタンプ遊びの紙をプリント生地に見立てて、カラフルで楽しい模様の服やネクタイ、鞄やメダル、めがねや冠などを作って遊びを締めくくった。紙のプリント生地からできた様々なものは、驚くほどの想像力が発揮されていた。

総括・反省および考察
「あそびの森」のプログラムとしては、２度目の実施であったが、今回も前回同様、親と子がともに夢中になってスタンピング遊びを楽しんだ。また、遊びの記念品とし、親と子の手形を色画用紙で額装して持ち帰ることを新たに加えることによって、親と子が、互いを違った面から再認識し、家族の絆もいっそう増したのではないかと考える。

遊びの支援に関しては、積極的に学生が家族と関わり、日ごろの授業での取り組みの成果が表われたと考える。

プログラム№②

活 動 名「スライムなどで感触遊びを楽しもう」

実 施 日　H 20 年 6 月 21 日（土）
10:00 ～ 11:45、13:30 ～ 15:15

ね ら い

・スライムや小麦粉粘土のさらさら､べとべと、すべすべ等の感触を身体で感じて楽しむ。

・伸ばしたり、ちぎったり、丸めたりしながら好きな物を作ったり壊したりして楽しむ。

担 当 者　三羽佐和子

参加人数　124 名　　参加家族 44 組
（保護者 52 名／子ども 72 名）

手伝った人数および担当

教員：6 名　学生 20 名

担当内訳／受付・案内・託児・遊びの支援

内　　容

・学生は事前にスライム・小麦粉遊びをしたので、遊び方わかっており、ポイントも掴んでいたので、説明はうまくできたし、子どもたちも遊びのことをよく理解をし､すぐに取り組んだ。

・スライムを作る過程で、ゲル状に大きく変化するところで、子どもたちは大きな感激の声をあげていた。この経験は作る過程を経験させることで得られるもの。完成品でなく、最初からさせたことが感激に結びついたと思う。

・小麦粉のさらさらが、水を入れべとべとになったり、水を入れて小麦粉に混ぜ込んであった食紅の色が表れ、色つき粘土になったりしたのを、魔法みたいと感激する子どもたちの姿から、家庭ではできない経験ができたと思う。

・グループによって色が異なったため、自分の好きな色の所へ異動したり、ある程度遊んでから、違うグループの所へ行って、交換したりする姿がみられた。また、他の色と混ぜて意欲的に楽しむ等姿も見られた。

・スライムも粘土も、殆どの子どもが大喜びで感触遊びや製作遊びに取り組んでいた。中には汚れることをいやがる子もいた。無理はせず、親が楽しんでもらうように伝えた。その親の姿を見て、子どもが再度取り組む姿もあった。

・小麦粉粘土の水の分量が難しく、べとべとになったりしたが、小麦粉をたして切り抜けていた。失敗は学生にとり良い経験だと思う。

図３. 小麦粉粘土の感触を楽しんで

総括・反省および考察

・参加者は欠席者があり、午前 55 人、午後 69 人だった。丁度良い人数だと思う。

・大きな混乱もなく､比較的スムーズに流れた。何度も学生と打ち合わせやリハーサルを行ったり、前日までの準備をしっかりしたりした結果と思う。リハーサルの時間を十分とったことで余裕ができ、それが自信につながったようだ。

・子どもたちがとても楽しんでいる姿から、本日のねらいはおおむね達成できたと思う。

・幼児期に心の解放につながるこのような感触遊びを、十分にさせたいと思う。親の中にはこのような遊びに抵抗があったり、家庭ではなかなかできなかったりするので､「あそびの森」などの機会にぜひとも経験させたい遊びの一つである。

・歌、体操、手遊び、絵本などは何度も練習をしたので総体的によいできであった。また、実習へ行ってきた経験からか、どの学生も子どもへの話しかけ方に成長が見られた。子どもと接することは頭で考えることや理屈ではないことが伺える。何度も接する経験によって、学生自身の自信となるし､コツがわかってくるようだ。こういった意味からも「あそびの森」の必要性を感ずる。

・学生は昨年度の２月に前年度の２年生と一緒に「あそびの森」を行ったので、様子がわかっており、イメージができ、最初の話し合いからスムーズに運んだように思う。何度も経験することの必要性を感じた。

プログラム№③

活 動 名　「クマのプーさんを作りましょう」

実 施 日　H 20 年 7 月 12 日（土）
10:00 ～ 11:45、13:30 ～ 15:15

ね ら い

・日頃あまり使用しない小麦粉糊を紙にぺたぺた塗って、ぺったんぺったんと貼る感触を体験する

・子どもたちだけで大きなクマのプーさんを創り上げる達成感を体験する

担 当 者　篠田美里

参加人数　107 名　　参加家族 34 組
（保護者 39 名 / 子ども 68 名）

手伝った人数および担当

教員：6 名　学生 24 名

担当内訳／受付・案内・託児・遊びの支援

内　　容

子ども「ダンボールと新聞紙で出来た、プーさんに洋服を着せてあげよう」

保護者「子育て懇話会」

当日のプログラムは以下の様である。

1．手遊び
2．リズム遊び
3．くまのプーさんを作ろう
4．絵本
5．さようなら

図 4. 完成したプーさんをバックに

総括・反省および考察

この活動 (子ども) は、2 年生がプログラムを企画構成し、当日の進行を担当した。今回は同時に保護者対象の「子育て懇話会」を隣室で開くため、「あそびの森」では、子どもたちだけで遊ぶことになる。誰でも (年齢差に関係なく) 出来る活動内容であること、40 分間飽きることなく続けることが出来ること、そして、普段自宅では体験できない活動を、の 3 つの条件を満たす遊びとして「くまのプーさんをつくろう」の活動を考えた。ダンボールと新聞紙で大きなプーさんをあらかじめ 2 体 (午前の部と午後の部のために) 作っておき、新聞紙のプーさんに洋服を着せてあげようという活動である。新聞紙のままでは怖がる子どもがいるだろうと、上に薄い、白い紙を貼っておいた。糊は安全を考え「小麦粉糊」を使用した。プーさんの洋服の黄色は「ひまわり色」「黄色」「やまぶき色」を準備し年齢に応じて、色紙をびりびりやぶいて、ペタペタ糊をつけ、貼り絵のように、ぺったんぺったんと貼っていった。このべたべたペッタンは、子どもが受け入れてくれた場合は、指で糊をつけてその感触を楽しんだ。それ以外は、はけで糊をつけた。つるつるの色紙が糊をつけることでしんなりする感触を楽しみ、また、しんなりしてしまうために、紙がまるまったり、くっつきあったりして思うように貼れない体験をしながら、どんどん貼っていき、プーさんに洋服を着せていった。高いところはおねえさんに抱っこしてもらって貼っていくため、スキンシップとなり、仕上がる頃にはおねえさんとの信頼関係ができあがった。遊び終わった頃に、隣室の保護者を呼びに行き、自分が貼ったところを自慢げに説明している姿が見られ、学生の心が和んだ。

この遊びは学生の発案でプログラム企画をし、当日の進行も行ったが、各自がしっかりとした責任感と見通しを持ち、綿密な計画の下、進めていった。今回もペアになった子どもの年齢を考えて、計画した内容を進めていった。子どもに頼られた学生は自分の役割を認識し、楽しみながら責任を持ってこなしていった。この体験は、保育者に必要な責任感を育てる教材となる。また、活動の中でみられる様々な親子の関わりを体験するチャンスもあり、これからの保育者に求められる子育て支援について、課題を発見できるチャンスでもあった。

保護者の「子育て懇話会」に関しては 82 頁に詳しく記述されているので、ここでは省く。

プログラム№④

活 動 名　「親子であそぼう　はいるかなぁ」

実 施 日　H 20 年 8 月 30 日（土）
10:00 ～ 11:45、13:30 ～ 15:15

ね ら い

・発育・発達の著しいこの時期に、動作が上達する巧みな動きやリズム感覚を身につける。

・積極的にいろいろな運動に挑戦する意欲を身につける。

担 当 者　伊藤功子

参加人数　140 名　　参加家族 41 組
（保護者 45 名／子ども 62 名）
（見学者親子 12 名）

手伝った人数および担当

教員：4 名　学生 15 名

担当内訳／受付・案内・託児・遊びの支援

内　　容

1．手遊び
2．ディズニー体操
3．親子体操
4．親子で遊ぼう入るかなぁ
5．投げて遊ぼう入るかなぁ
6．跳んで遊ぼう
7．みーちゃんのお話

図５. 新聞紙をくぐって

総括・反省および考察

昨年は、本番一発勝負であったが、今回は学生指導の面で時間をかけることができた。この活動は、親子と遊ぶことが中心の為学生の関わりは少なめではあるが、よく言葉がけや運動の補助に積極的に関わりを持とうとしている姿が見られた。

定番である親子体操では、一番人気は腕を持ってもらい親さんの膝の上から歩いてのぼり前回り後回りする遊びであった。「入るかなぁ」は親さんも挑戦できるよう新聞紙を使い、新聞紙の中央に穴をあけて破らないようにくぐり抜ける遊びと跳ぶ遊びで集中力をつけられるようにした。親子で楽しく競争ができたようだ。

図６. お母さんの膝を登って

投げ入れる遊びでは、子どもの年齢に合った遊びができるように、高さに違いを持たせたり、投げ入れる穴に大小をつけたり工夫してみた。

投げる動作は、小さい時の経験が大いに影響するので毎回組み入れている。日常生活にこのような動作はないので取り入れてもらいたい。前回運動後の静がなかったので、みーちゃんのお話を静かに聞く時間を設定した。よくみーちゃんを知っている子どもは、みーちゃんとお話ができたようだ。

今回は、「入るかなぁ」のテーマでくぐる動作と投動作を中心に活動した。夏場の活動ということもあり運動量は確保されたが、長時間の活動には限界があった。次回は遊びの種類を増やし身体に刺激を与え、親子と学生が一体となる教材を研究したい。

プログラム№⑤

活 動 名　「英語のカルタ取り」

実 施 日　H 20 年 9 月 20 日（土）
10:00 ～ 11:45、13:30 ～ 15:15

ね ら い

・いろいろな動物を英語で言ってみるために、まず、尻「しっぽ」を見せて、どのような動物か尋ね、推測する。

・英語のアルファベット文字に親しむために、英語のカルタ取りをグループごとに学生と行う。

・カルタの中に出てきた「キツネ」を使ったパネルシアターを皆で鑑賞する。

担 当 者　長谷部和子

参加人数　95 名　　参加家族 39 組
（保護者 39 名／子ども 56 名）

手伝った人数および担当

教員：4 名　学生 19 名

担当内訳／受付・案内・託児・遊びの支援

内　　容

プログラム

1．挨拶・手遊び「ぶたさん」
2．英語の歌
「Under the Spreading Chestnut tree」
3．いろいろな動物に変身･英語では何かな？
4．「しっぽ取り」ゲーム
5．英語のカルタ取り
6．パネルシアター「きつねのつねた」

図７. どんな動物がいるかな？

総括・反省および考察

この活動の目的は、子どもたちが日本語以外にも英語という別の言葉があるということを認識し、英語に親しむことを第一としている。

最初に､幼児が興味を持つ身近な動物の｢しっぽ｣を毛糸で作り、その「しっぽ」から動物を推測することから始めた。学生たちは｢しっぽ｣作りを始めているうちに、いろいろな動物の「しっぽ」の形が様々であることに気付き、その「しっぽ」を身につけて、最初にその「しっぽ」を見せ、その動物のジェスチャーをすることで、より子どもたちが推測しやすいようにした。それぞれの動物が出てきたところで、皆でその動物になるジェスチャーを行い、「しっぽ取り」ゲームに入った。これらの活動は、体を使う小運動になり、楽しめた。

２番目に英語のアルファベット 26 文字で始まる「動物」を全て英語で練習し、「英語のカルタ取り」を行った。数人の親子のグループの中に学生が２～３人入り、学生の指導（連呼）のもとにゲームを行った。

カードの中にあまり一般的でない単語も入っていて、大人も初めて耳にする単語もあったよ

図８. カードをみーつけた

うであるが、そのような場合は、大人も子どもも全く同じ条件で、真剣にカード取りを行っていた。グループで行った後、同じカルタの拡大版を３組用意し、床に並べて皆で取りあった。今後の課題として、英語の発音に慣れていない学生も見られ、連呼する際に、少々不適切な発音も耳にした。事前に時間をかけて発音指導する必要があると感じた。

最後にパネルシアター「キツネのつねた」を学生２人が上演したが、好評であった。当ゼミでは、全員が「パネルシアター」あるいは「エプロンシアター」のいずれかを選択して上演することになっているが、大勢の観客を前にして発表することは少ないので、これは、とても良い機会であった。

今後、英語でパネルシアター等を上演してくれる学生が出てくることを期待する。

２　後期プログラム（10 月～２月）

プログラム№⑥

活 動 名　「わらべうたでリトミック遊びをしよう」

実 施 日　H 20 年 10 月 11 日（土）
10:00 ～ 11:45、13:30 ～ 15:15

ね ら い

・日本の伝承あそび歌 (わらべうた) を歌い、親子での遊び方を知り、歌う楽しさを培う。

・親子で遊ぶ、みんなと遊ぶを通して親子がスキンシップを楽しみ、気持ちを開放する。

担 当 者　篠田美里　(当日の学生指導　三羽)

参加人数　98 名　　参加家族 36 組
（保護者 41 名／子ども 57 名）

手伝った人数および担当者

教員：６名　学生 24 名
担当内訳／受付・案内・託児・遊びの支援

図９.「なべなべそこぬけ」回れるかな

内　　容

参加希望幼児の年齢は、２～３歳児が多い事を考慮し、親子でスキンシップをとれる活動を中心とし、日本の伝統文化であるわらべうたで遊びを伝える内容とした。また、幼児が歌いやすい「どれにしようかな」などのとなえうたを入れた。

当日のプログラムは以下のようである。

１．手遊び　・キャベツ　　・ぶたさん
２．遊びましょう　・どれにしようかな、ロンドンばし、こーろりん、お寺のおしょうさん、なべなべそこぬけ、落ちた落ちた
３．絵本　・はらぺこあおむし　・どうぞのいす
４．腹話術みーちゃんのお話

総括・反省および考察

・この活動は、子どもと音楽について学んだ２年生が中心となってプログラムを企画構成し、進行を担当。特に、幼児と保護者とのスキンシップを図るねらいを達成できるように考えた。抱っこされたり、抱きついたりは日頃の生活の中でもよく見られる動作だが、歌の中に取り入れられることによって、家族の誰とでも照れなくスキンシップが図れる利点がある。

・午前は小さい子が多く、なかには赤ちゃんもいて、遊びを進めるのに難しい内容もあったので、その年齢にあうように予定と変更をしたものもあった。

・「どれにしようかな」についは、午前は予定したようにしたが、わかりにくかったので（リンゴとイチゴが目の前にないのに、お母さんの手の中に入れたという想像が難しかった)、午後は壁面装飾で飾ってあったリンゴとイチゴを放る真似をしてキャッチをさせるという方法をとったら、イメージがしやすかったようで、歌とうまくマッチできた。

・進行ではしっかりとした責任感と見通しを持った綿密な計画が必要となる。２年生は１年生とのコミュニケーションを図りつつ、自分達の役割を認識し、楽しみながら責任を持ってこなしていった。そんな先輩の姿を真近にした１年生は、自分が出来ることを能動的に関わっていった。この体験は、保育者に必要な責任感を育てると考える。

・子どもに振り回される親や、子どもの思いを良く聞きながら子ども共にわらべうたを楽しむ親など、活動の中でみられる様々な親子の関わりを体験し、これからの保育者に求められる子育て支援について、課題を発見できるチャンスとなった。

・今回は担当者（篠田）の都合で代役（三羽）の当日指導になった。しかし、前もっての準備やリハーサルがしっかりしていたことと、両者の打合せがなされていたことで混乱もなく行うことができた。学生も自分たちがしっかりしなくてはという意識があり、予定どおりにプログラムを進めることができた。

プログラム№⑦

活 動 名　「親子で作るペーパークラフト」

実 施 日　H 20 年 11 月 29 日（土）
10:00 ～ 11:45、13:30 ～ 15:15

ね ら い

・親と子どもが一つの作品を一緒になって作る事により、親と子どものコミュニケーションを図る。また、できあがった作品で遊び楽しむ。

担 当 者　松尾良克

参加人数　104 名　　参加家族 39 組
（保護者 47 名／子ども 57 名）

手伝った人数および担当者

教員：３名　学生 26 名

担当内訳／受付・案内・託児・遊びの支援

内　　容

１）学生による手遊び

２）ペーパークラフトを作成し、作品で遊ぶ

３）大型絵本読み

遊びの様子

参加家族は、午前の部では申込 37 組のうち 19 組（51.4％の参加率）で 50 名の参加者があり、午後の部では、申込 37 組のうち 20 組（54％の参加率）で 54 名の参加者となった。

事前に、インターネットサイトで公開されている無料の作品用紙を印刷し、参加家族ごとに作品用紙を袋詰めして準備しておき、受付時に参加者に配布した。

活動開始時に、学生による手遊びで子どもの気持ちを引きつけた後、ペーパークラフトの作り方や出来上がった作品での遊び方などの説明を行い、作品作りに入った。

ペーパークラフト作成では、切る・折る・貼り付けるの作業があり、各参加者は親子共々、夢中で作成作業に没頭していた。２人以上の子どもと参加された家族に対しては、学生がそれぞれの子どもに付きそい、子どもと一緒になって作品を作り、家族と一緒になって楽しみながら、サポートを行っていた。

参加者の中には初めてペーパークラフトを作る方もあり、子どもより夢中で作品作りに取り組んでいる保護者も見受けられた。また、子どもも自分で切ったり、貼ったりしていろいろな作品が出来上がることに喜びを感じていたようだった。

作品には、クリスマスツリー・グライダー・紙（竹）とんぼ・指人形・吹きごま等があり、作成後親子それぞれが飛ばしたり、回したりして楽しんでいた。

総括・反省および考察

子どもたちがどの程度ペーパークラフトに目を向けてくれるか不安であったが、自分ではさみを使い、切り、貼り付けることにより作品ができあがる事を楽しんでいた。

小さな子どもにとって、はさみを使い、「線にそって切る」という作業は至難の業であるだろう。上手に切れた時など、親に自慢げに見せていた子どももいた。また、初めてはさみを手にして「紙を切る」事そのものに興味を持ち、細かく切って楽しんでいる子どももいた。

ペーパークラフト作成は、マニアックなところもあり、普段の生活では目にすることも少ない。今回参加された保護者の方からも、「初めて作るのだがとても楽しい。他にもいろいろあれば教えてほしい。」との声も聞かれた。

今回も作成する作品を選ぶに当たり、インターネット上では数々の作品が紹介されてはいるが、「子どもが作る」ことを基本に、簡単に出来るもの、作った後で楽しめるもの等を考慮しながら探すと、選択に難しさがあった。

また、子どもの切り損じも数多くあり、作品用紙の追加依頼も多く、印刷物の予備を用意しておくことにより不満無く作品作りができたと思われる。

図 10. 好きな形を切ろう

プログラム№⑧

活 動 名　「クリスマス会」

実 施 日　H 20 年 12 月 20 日（土）
10:00 ～ 11:45、13:30 ～ 15:15

ね ら い

・プレゼントを入れる靴下を作ったり、クリスマスに関する絵本を見たりして、サンタクロースがやって来るのを楽しみに待つ。

・歌ったり手遊びをしたり製作したりなど、さまざまな活動を通して、クリスマスの行事を親子で楽しむ。

担 当 者　三羽佐和子

参加人数　126 名　参加家族 46 組
（保護者 53 名／子ども 73 名）

手伝った人数および担当者

教員：５名　学生 38 名
担当内訳／受付・案内・託児・遊びの支援

図 11. 作った靴下にプレゼントを入れてもらう

内　　容

1．歌と手遊び
「あわてんぼうのサンタクロース」「こぶたがみちを」「ポケモン」

2．靴下作り（プレゼント入れ）
四つ切り画用紙を半分に折り、大きな靴下を作る。その靴下に折り紙で作ったサンタクロースを貼ったり、好きな絵を描いたりして、靴下の形のプレゼント入れを作った

3．体操　「崖の上のポンニョ」

4．大型絵本　「まどからのおくりもの」(午前)
「ぐりとぐらのおきゃくさま」（午後）

5．さよならの挨拶とちょっとしたお菓子のプレゼント（靴下に入れて帰る）

総括・反省および考察

・午前は親子の合計が 73 名、お手伝いの学生が 38 名と多く、また、靴下の製作に場を取ったことから、保育実習室が狭く感じた。机がなくてビニールシートの上での製作となったので、足の踏み場がないという状態であった。欠席があることを見越して人数を設定したが、意外と欠席者が少なかったためである。同じ組数に案内を出したのに、午後は 53 名と丁度良い人数となった。人数調整はなかなか難しいところである。

・製作は思った以上に子どもたちは喜び、親と一緒になって工夫をしながら絵を描いたり、折り紙でサンタクロースを作ったりしていた。小さい子どもたちは親の方が一生懸命に取り組んでいた。はさみを初めて持つ子もいて、学生が四苦八苦して切る手伝いをしていた。これも学生にとっては良い経験である。

・２年生の学生たちにとっては、昨年から合計して３回目の「あそびの森」である。学生の反省文に『去年に比べると２年生は子どもの前に立っても堂々としていてさすがだなと感動しました。子どもの心を惹きつけているし、話す速度や話し方など、子どもが聞きやすいように工夫していて、同級生にみえなかったし、尊敬したい子がたくさんいました。みんな本当に良い先生になれると思います。』とあるように、それぞれの学生の成長が感じられた。継続して経験することが大切であると感じた。

・子どもへの接し方についても成長が見られた。『今回一番気を付けたことは、子どもたちになるべく『NO!』とは言わずに自由に遊んでもらうことでした。予定通りにスケジュールをこなすことも必要ですが、子どもたちに無理をせず、遊んでもらい、楽しかったという気持ちを持って帰ってもらいたいと思ったからです。（中略）等身大の気持ちで遊ぶことが出来たと思います。』

反省文にみられるように、子どもの様子を見ながら、心を探りながら活動しようとする学生の姿があり、この姿が保育者としての資質や、保育する力の向上につながっていくのだと感じた。

プログラム№⑨

活 動 名　「粘土遊びでクッキー作り」

実 施 日　H 21 年 1 月 24 日（土）
10：00~12：00　13：30~15：15
集団給食室

ね ら い

・親子で楽しい手作りおやつ作りを体験する。
・子どもや親の想像力を刺激する。
・食べ物を大切にする気持ちを養い、食に対する意識を高める。

担 当 者　若杉雅夫

参加人数　149 名　参加家族 54 組
（保護者 60 名／子ども 89 人）

手伝った人数および担当者

教員：５名（幼教３名 / 食栄２名）学生：41 名
担当内訳 / 案内・受付・託児・遊びの支援

内　　容

「粘土遊びのクッキー」は、平成 17 年から取り入れ、今回で４年連続の実施となる。２～３年周期で参加家族の入れ替えがあることを考えると、プログラムの内容を毎年変化させることは必要と考える。しかし、このプログラムは毎回参加者の好評を博し、申し込み数も右肩上がりにある。事実、本年度も一月下旬という寒い時期の実施にもかかわらず、149 名という多数の参加者を得ている。こういったニーズの高さに併せ、四大食健康学科との共同事業であるため、学園全体で子育て支援に取り組むシンボルと捉え、毎年継続実施している。

内容は定番となっているが、一卓のテーブルに１～２組の家族がつき、クッキーの生地作り（白・茶・緑の三色）から始め、形を作り、焼き上げ、試食までを体験し、その支援を学生が行う形をとっている。

クッキーの形作りは、クッキー型を使わず、子どもや親の手で作ることを活動の基本としている。クッキー型を使用しないのは、型に依存することなく、工夫を凝らし、たとえ不恰好でも楽しく精気に満ちたオリジナルクッキーを親子で協力して沢山作ってほしいという願いがあるからである。

クッキーの焼き上げは、毎年東海学院大学食健康学科の教員が担当している。焼き上がるまでの待ち時間は、学生と話の花を咲かせる家族や、学生と鬼ごっこする子どもなど様々にその時を楽しんでいた。

焼きあがったクッキーを前に、家族で品評会と試食。思わぬ出来栄えに、笑い声が絶えないほほえましい情景が給食室いっぱいに広がった。家に持ち帰るクッキーを大切に包んで、笑顔で解散した。

総括・反省および考察

今回で４回目の実施となる「粘土遊びのクッキー作り」は、毎回食健康学科の協力を得、集団給食室を活動の場として開催している。この間、プログラムの内容には変化をつけていない。変化をつけない理由としては、この活動が今の内容で参加者に受け入れられている（リピーターが多い）ということと、プログラムを提供する側から考えても、現在の活動からの改善点があがってこないことにある。当然、今後の活動で改善点が浮かび上がれば、修正点を検討し、プログラムの内容を充実化する。

しかし、食品を扱うので万全の安全性を図ることは必要不可欠である。そのため、毎回ではあるが材料の吟味、用具の準備、学生の支援、クッキー作りの方法など、食品の安全面と衛生面に関して、特に配慮した。

学生のクッキー作りの支援に関しては、各テーブルに２年と１年のペアーを一組充て、協力して行えるようにした。このシステムは、先輩にとっては、強い主体性と責任感につながり、後輩にとっては、先輩に対する尊敬と今後の学習の目標につながるのではないかと考える。

図 12. 自由な発想で楽しいクッキーの出来上がり

プログラム№⑩

活 動 名　子ども：「おねえさんと遊ぼう」
（保護者：「子育て懇話会」）

実 施 日　H 21 年 2 月 14 日（土）
10:00 ～ 11:45、13:30 ～ 15:15

ね ら い

・保護者と離れて遊ぶ体験をとおして、初対面のおねえさんや他の子どもとの交流をする。

担 当 者　杉山喜美恵・生嶌亜樹子

参加人数　77 名　参加家族 27 組
（保護者 30 名／子ども 47 人）

手伝った人数および担当者

教員 : 5 名　学生 :62 名
懇話会講師 2 名
担当内訳 / 案内・受付・託児・遊びの支援

内　　容

1．オープニング（ダンス：アンパンマン）
2．エプロンシアター（はらぺこあおむし）
3．おねえさんと遊ぼう
　(1) 製作（紙コップのおひな様・プロペラ・ぶんぶんごま）
　(2) 段ボールのおうち
4．大型絵本「なんにもせんにん・みんなでポン」
5．エンディング（ダンス：崖の上のポニョ）

総括・反省および考察

本実践は、保護者の子育て懇話会と同時開催の学生による託児を中心とする企画である。

図 13. 段ボールで作った家に入って

当日は参加者が会場に到着した順に、託児担当の学生との組合せを行った。全体企画に移行するまでの間、学生たちは、初対面の子どもとふれあい、特に 2 年生を中心に、保護者と積極的に交流しようとする姿がみられた。このようにあらかじめ企画されたプログラム以外の時間が、子育て支援における資質を獲得するための有意義な場となっている。

オープニングのダンス・エプロンシアター終了後、保護者は隣室の懇話会会場へ移動した。保護者と離れることを不安に感じる子どももいたが、担当学生が状況に応じて対応していたようであった。

「おねえさんと遊ぼう」と題した自由遊びは学生が企画した 3 つの製作を中心とし、およそ 45 分程度の時間をあてた。

自由遊びも後半になると、当初の託児ペアが自然と変化する様子がみられる。その際、子どもの意思（他の子どもと一緒に遊びたい、他のおねえさんとも遊びたい、ひとりで遊びたいなど）をできるだけ尊重しながら、学生一人ひとりが担当の子どもの託児に最後まで責任を持ち、目の届かない子どもが発生することのないように、全体として留意していく必要がある。この課題については、ゼミ単位での実施であることを生かし、学年間の協働・ゼミ間の協働を構築することをめざして、今後の指導のあり方に反映させていきたい。

また、「段ボールのおうち」は生嶌ゼミで 2007 年度後期より継続している実践であり、大型段ボールで子どもが入って遊べる家を制作し、子どもが楽しむことのできる様々な仕掛けで装飾したものである。2008 年度にはこの「段ボールの家」を持ち出して学外でのイベントに参加する機会を得た。そこでは、子どもがどのような仕掛けを楽しむのかを予想しながら制作し、事後に実際の子どもの姿を通して学生自身による振り返りと改善案の提案を行ってきた。この「段ボールの家」は学生にとって、自らの実践を試行することのできる実験装置としての機能をもっていたといえる。実践を改善し続けていくことの必要性をゼミの活動をとおして学ぶ機会として今後、ゼミの学習プランとしての位置づけや、学習シートの開発等を行っていきたい。

プログラムNo.③⑩

活 動 名　「子育て懇話会」

実 施 日　H 20 年 7 月 12 日（土）
H 21 年 2 月 14 日（土）
10:30 ～ 11:30、14:00 ～ 15:00

ね ら い

・子育てについて同じような子どもを持つ様々な人たちと話し合い、今後の育児の参考とする。
・日頃の育児について同じ子育て仲間と話し合い、悩みや喜びを語ることで気持ちを発散し、子育てを楽しむ醸成づくりをする。

ハシリテーター

高橋明子　後藤佐智子　渡里禎子
田中ヒロ江　神谷かつ江　三羽　佐和子

内　　容

親数人ずつのグループに一人のハシリテーター（心理専門の先生、元幼稚園長、本学幼児教育専門の教員）が入り、話をまとめた。

＜話し合いの記録・・１・２回分＞

・２～３人兄弟の子育てについて

一人目にはとても神経質になっていたが、二人目・三人目には少し余裕をもって見ていられるようになった。

A　一人目を育て、予測がつくから安心して見ていられるのだろう。初めての場合は親も不安感が強く、それが子どもに伝わったりする。

・父親の育児参加について

父親が子どものようだと４人の母親が言った。例えば、ゲームでポケモンをよく知っていて子どもと話が合う。子どもの躾に無頓着で「大きくなったらできる」と知らん顔をしている等。

離乳食の時期に、１日３回１週間で 21 回離乳食を作って食べさせることに疲れて、「１回ぐらいやってよ！」と切れたら、父親が食べさせることを１回やってくれた。父親はそれがおもしろかったらしく、それ以来、毎朝母親が朝食はつくるが父親が食べさせている。

A　父親はだめだと決めつけないで、働きかけることが大切。やり方がわからないのと、どう接してよいかもわからないと思うので、根気に伝えていくことが必要。

・排便の始末について

幼稚園ではうまくできるのに、家ではやって と言うし、できないという。

A　幼稚園でできるのなら本当はできるのだと思う。子どもは時折失敗する。そのとき先生は気にせず、黙ってパンツを代えるが、親は汚れたことを気にする。それだと家では心配でできないという場合がある。（これを聞いて質問をした母親が「そういえば汚れていると注意をすることが多い」と反省していた）

図 14. ハシリテーターを中心の懇話会

・一人で子どもを寝させることについて

一年生なったので、「一人で子どもを寝させたい」という話に、他の母親がいろいろ意見を出した。

机やベッドは１年生ではまだ必要ないと思い親が一緒の部屋で寝ているし、勉強も居間のテーブルでしている。子どもが一人で寝たいと言ったとき「ママが寂しいからもう少し一緒に寝て」とお願いした等。

A　子どもはまだまだ親のそばがよい。自分から一人でというまで待つ方がよい。

総括・反省及び考察

数人のグループということで、親にとって話しやすかったようで、どの親も思いを話していた。

また、先輩の話を聞いて、新米ママさんが安心したり、同じような悩みを持つ親がいることで納得したりと、ハシリテーターが橋渡しをするだけで、話が続いていった。こういう体制がとても大事で、親が自分で解決する力をつけることができよい。

父親の参加者も毎回３～４人あり、その意見が母親の参考になったり、父親にすれば他の母親の話と自分の妻の話とが結びついたりして、互いに参考になったと思う。

3．その他のプログラム

プログラム№①

活 動 名　手作りおもちゃで遊ぼう
（第２ブロック　子育てを考える講座）

実施日・会場

H 20 年 11 月 26 日（水）
10：15am ～ 11：30am
北西部体育館（岐阜市網代）

ね ら い

手作りおもちゃで楽しく遊ぶ。

担 当 者

杉山喜美恵・生嶌亜樹子

参加人数

未就園児親子　36 組

手伝った人数および担当

教員：２名　学生：50 名
岐阜市青少年育成市民会議家庭部会員

内　　容

第２ブロック青少年育成市民会議家庭部会（岐阜市）の依頼を受け、子育て講座を企画実施した。

子どもの発達に合わせた手作りおもちゃを準備し、それらを使いながら子育て講座に参加した親子とともに遊んだ。

「水曜日の１、２時間目」という我々の都合に合わせていただいたため会場が体育館となってしまい、寒い時期、暖房のきかない体育館での開催で参加者数が少ないのではと心配されたが、当日は天候にも恵まれ、36 組もの親子に参加していただくことができた。

当日の流れは、以下のようである。

オープニング（あんぱんまんダンス）
手作りおもちゃでのあそびタイム
（含工作：手作りサンタ）
エンディング（崖の上のポニョ）

子どもの手形を使った工作はクリスマスが近いこともあり好評であった。

また、それぞれのおもちゃで全身を使って遊ぶ子どもたちの姿や学生たちが笑顔でかかわる姿があちらこちらで見られた。

総括・反省および考察

ブロック単位の大きなイベントを請け負うことは初めてで、どの程度の参加者があるか当日にならないとわからない状況下での準備は戸惑うことも多く、そのため学生への指導が適切とはいえず、また、時間数も限られていることもあり、準備が不十分であったことが反省点として残る。

しかし、参加したお母さんたちが「とても楽しかった」、「手作りおもちゃのノウハウが教えてもらってよかった」、「子どもがゴキゲンだった」など非常に喜んでみえてよいイベントになったと、主催者サイドから暖かい感謝のことばをいただけたのはありがたかった。

また、学生たちも自分たちの作ったおもちゃで子どもがどのように遊ぶのか、どのようなおもちゃを子どもは好むのかなどを参与観察することができ、発達とおもちゃの関連性やおもちゃを媒体とした子どもとの関わり方を学ぶことができた。さらに、地域子育て支援イベント運営のノウハウを学ぶ希少な機会になったといえる。

今回は、２ゼミの合同参加であったが、このような大きなイベントを責任もって実施するためにはある程度準備に時間をかける必要がある。また安全にイベントを実施するためにも合同参加という形にしたことはよかったと思われる。

このようなイベントの依頼をいただけることは、当学の取り組みが地域に周知されてきたことを示しており、継続していくことの重要性と責任とを改めて感じている。また出張「あそびの森」を実施するには送迎等学校側の理解が不可欠であり、それが得られていることに感謝する次第である。

図 15. 学生が手作りしたおもちゃで遊ぶ

プログラム№②

活 動 名　児童センターとの連携プログラム

実施日・会場

第１回　H 20 年 12 月 10 日（水）

第２回　H 20 年 12 月 17 日（水）

山県市「げんきはうす」

ね ら い

手作りおもちゃで楽しく遊ぶ

担 当 者

第１回　長谷部和子　第２回　杉山喜美恵

参加人数　山県市の親子

第１回　25 組　　第２回　25 組

手伝った人数および担当

それぞれ教員：１名　学生：36 名

内　　容

１．はじめのあいさつ、リズム体操　（げんきはうす職員）

２．おやこ体操

３.一緒に歌いましょう（鈴や太鼓・タンバリンを使って）

４．サンタさんの登場（学生）

５．おわりのあいさつ（げんきはうす職員）

図 16. エプロンシアターを演じる

総括・反省及び考察

学生の学外活動として、要請のあった地域子育てセンターへの「出張あそびの森」である。

クリスマスにちなんだ「歌」を皆で歌い、それに合わせて鈴や太鼓、タンバリンを使って合わせる。１回目は１・２歳児、２回目は３・４歳児対象で年齢に合わせた歌を選択し、歌う場合は子どもたちの中に学生たちが入って、ゆっくりと親さんと合わせながら歌うよう心がけた。クリスマスという子どもたちの大好きな行事であり、学生たちも張り切っておもちゃなどを作成し持参した。親子には様々なケースがあって、その関わり方も様々であると、学生たちは後の反省会で語っていた。

プログラム№③

活 動 名　児童センターとの連携プログラム

実施日・会場

H 21 年２月 25 日（水）

高富町子育て支援センター

担 当 者

長谷部和子　学生６名　高富町職員

参加人数

山県市高富町の親子　25 組

手伝った人数および担当

それぞれ教員：１名　学生：６名

内　　容

１．はじめの挨拶､リズム体操（高富町職員）

２．おやこ体操

３.一緒に歌いましょう（鈴や太鼓・タンバリンを使って）

４．エプロンシアター｢はらぺこあおむし｣(学生)

５．おわりのあいさつ（げんきはうす職員）

総括・反省及び考察

山県市「げんきはうす」の「クリスマス会」の様子を聞いて、同じ市に位置する高富町から要請をうけた。しかし、３月のひな祭りのイベントなので３月にという要請は２年生は講義が終了し、１年生は実習中ということもあって、参加者は２年生の６名のみとなった。

２年生は卒業前で充分力をつけていて、親さんや子どもたちとの関わりやエプロンシアターの演じ方には目を見張るものがあった。職員や参加した親子にも非常に評判が良く、学生らも自信をつけていた。

プログラムNo.④⑤⑥

活 動 名　ブラジル人親子支援プログラム

実施日・会場

第１回　H 20 年 12 月７日（日）
第２回　H 21 年１月 18 日（日）
第３回　H 21 年２月８日（日）
※時間は各回ともに 13:30 ～ 16:00
場所は保育実習室「あそびの森」

ね ら い

ブラジル人親子の就学支援を行うとともに、学生が日本人以外の子どもたちへの関わりについて学ぶ。

担当者　長谷部和子・高山育子・杉山喜美恵

参加スタッフおよび参加者数

回	子ども	保護者	学生	教員
1	16	13	27	8
2	12	11	24	8
3	21	22	15	9
計	49	46	66	26

内　　容

第１回「ちょっと早いクリスマス」
① 初めの挨拶（日本語・ポルトガル語）
② 手遊び
「あおむし」日本語・ポルトガル語
③「数の数え方」の説明
④トランプ遊び
④で親は別室に移動して懇話会に参加。
☆おやつタイム

第２回「日本のお正月について知ろう！」
① 歌「お正月」
② 食べ物、遊び、お年玉、千支（十二支の由来）
③ 歌って踊ろう！
「なんじゃ・もんじゃ・にんじゃ」
④ カルタ、百人一首、すごろくで遊ぼう
⑤ ぶんぶんゴマを作ろう
④⑤で親は別室に移動して懇話会に参加。
☆ おやつタイム

第３回「節分であそぼう！」
① 歌って踊ろう！「おにのパンツ」
② 紙芝居「せつぶんだ、まめまきだ」
③ 鬼がきたよ！！　豆まき体験
④ 絵本「おにたのぼうし」
⑤ 歌って踊ろう！「なんじゃ･もんじゃ･にんじゃ」
⑥ 鬼の面をつくろう
⑦ 折り紙（マス、手裏剣）プレゼント
⑥⑦で親は別室に移動して懇話会に参加。
☆おやつタイム

総括・反省及び考察

今回の講座では、３回とも親の懇話会を開催した。その間、子どもたちは保育実習室で学生とともにいろいろな遊びをしながら過ごした。参加した子どもたちの年齢が比較的高かったため，一部の子どもを除いて母子分離はスムーズであった。

「懇話会」では、保護者は６～７人のグループに分かれ、元幼稚園園長などがファシリテータとして各グループに１名つき、育児の悩みに対するアドバイスを行なったり、参加者相互の日常の情報交換を促進したりなどした。グループによっては日本語の理解度を考慮して通訳を介した。

このようにファシリテータが参加して話をするという経験はほとんどなく、いろいろな話を聞けてとてもよかったという意見が参加者より聞かれた。

図 17. 節分を楽しむブラジル人親子

子どもたちは学生たちとすぐに仲良くなり、楽しく遊ぶ姿が見られた。学生にとっても日本人以外の子どもたちとかかわる機会は少なく、特に実習経験がない１年生はほとんどが初めてであり、とても有意義な機会となった。

Ⅱ　実践の総括

1.「あそびの森」での学生の学び

「あそびの森」の活動が終わると、項目を決め学生一人一人が反省を書いて提出している。それをもとにゼミの時間に反省会を行う。それぞれが感じたことや反省したことを話し合うことで、一人の学びがみんなで学ぶことに繋がったり、次回の「あそびの森」の活動に活かしたりできるからである。

以下はその反省記録の一部である。

○ 自分の役割について感じたことやそれから得たこと

・司会役をしていたのですが、もっと具体的に言葉がかけられればよかったなあと思いました。司会は「あそびの森」の一番初めに子どもや保護者に向かって話すので、そこで印象が変わったり、不安に思っている子どもたちや保護者の気持ちを、和らげたりする事が出来るのではないかと思いました。私は子ども向けにいつも声かけをしていたけれど、一緒に司会をしていた○さんの姿を見て、子どもたちだけでなく、保護者に向けての声かけも必要だと感じました。

・絵本を読む係でした。読む前にとてもざわついていて、どう声かけをしてよいか困りました。大きな声で「みなさーん！絵本を読みます」と言うと、子どもたちは前に集まってくれました。しかし、静かにならず、そのまま絵本を始めました。（中略）静かになっていないのに読んでしまったので、最後まで落ち着いて聞ける環境にならなかったのだと思います。このことから、子どもが引きつけられるようなことを考えてからやらなければと思いました。

・トレーに絵の具を準備しました。その時にどれだけ絵の具を作る等の理解が出来ていなかったため、準備に少し手こずってしまいました。特別参加の初等教育の学生にも説明不足だったために、何をしてよいか解らない思いにさせてしまっていたと反省しました。自分が理解できていないまま行動してしまうのでなく、理解できるまで教えてもらってから行動すれば、初等教育の学生ももっとスムーズにできたのではないかと反省しました。

・手遊びをしたのですが、リスムが取りずらく、小さい子どもには少し難しかったかなと先生に指摘され、もう少し考えてやるべきだったと思いました。全体的には大きな動き、大きな声でやるように意識し、動けたと思います。

絵の具遊びの説明は、子どもたちにわかりやすいように実物を見せたり、動きをつけて説明できたりしたのでよかったなと思いました。しかし、手型の説明がうまくできなかったところがあるので、事前に何を説明するのか、しっかり考えておいた方が良かったなと思いました。

図 18. 手遊びで子どもを引き付ける

○ 子どもの姿から感じたことや学んだこと

・絵の具を足や手につけて遊びました。ただペタペタつけるだけではなく、走り回ったり、側転をするようにして、両手両足でつけたりと、子どもだからこそ考えてやる工夫も見られました。家では出来ないからダイナミックにやる子が多くて、子どもにとってはああいう思い切って出来る遊びはすごいと思いました。子どもたちはとても生き生きとしていました。自由にやりたいことをやって楽しそうにしている姿は、本当に輝いていました。

・親は懇話会へ、子どもは新聞遊びを始めるとき、「じゃあね」と手を振る母親に子どもたちと一緒に手を振り送り出す。母親がいなくなると、姉にしがみついて泣き出した弟がいた。姉は「新聞遊びをしたい」と言うけれど、弟は泣きじゃくって姉から離れないので、姉にお願いして一緒に弟を隣室の母親の所へ連れて行った。できれば、弟にも新聞遊びをしてほしかったけれど、何ともならなかった。残念だった。

・子どもたちが興味を持ち、心から楽しんでいると、飽きないことや、自分たちで新しい遊び方を考えてどんどん遊びが変化していくのがよくわかった。そして、一緒に遊んでいて私もとても楽しくあっという間に時間が過ぎていった。

○ 全体を通して学んだこと

・子どもたちはいつも家では出来ないようなことができたので、すごく楽しんでいました。想像のつかないことなどもたくさん見られて、とても勉強になりました。ただ、遊びの目的が変わっていってしまったときに対応することが出来なかったので、次回では対応できるようにしていきたいと思いました。今回はお父さんの参加も多く、みんな楽しく親子で参加してくれて良かったと思います。

・保護者の方は周りで見守る人もいたけれど、記念に手型を持ち帰るということで、積極的に参加してくれていました。今回は自分の仕事で精一杯になっていたので、もっと周りも見て、気がついたことに行動できるように、次回は頑張っていきたいと思いました。

・最後の「あそびの森」でしたが、私はすごく楽しむことができました。1年生の頃は何をして良いか、どうかかわっていけばよいかわからず、ただ、先輩の姿を見て「ずごいな」「私もああいう風に動きたいなあ」と感じていました。いざ、自分たちが仕切っていくことになると「しっかりしなきゃ！」という気持ちになり、頑張ることができました。積極的に意見を出したり、提案をしていったり・・自分なりに出来たと思うので良かったと思います。また、異年齢の子たちが多いので、乳児から小学校の低学年の子どもたちとかかわることができ、とても良い経験になりました。（中略）

「あそびの森」を通して、子どもたちがどうすれば楽しい気持ちになるのか、どうすればわかりやすく伝えることができるか、どうすれば話を聞いてくれるのかなど、考えることが出来るようになりました。試したり、一緒に楽しんだり出来ることができました。「あそびの森」で学んだことをこれからの自分の就職に活かしていけるように頑張っていきたいと思います。

2．実践の総括

○ 学生の学びについて

学生の反省文を読み、教員が考える以上に様々な学びをしていることを垣間見ることができた。子どもの理解については園では見せない姿、例えば母親が懇話会に行った後、悲しくて仕方のない子どもの姿、きょうだいでの葛藤、きょうだいで見せる思いやり等。また、親子がふれあう様子や親の子どもへの思い、特に父親とのふれあいについては、殆ど実習先では見られない。これらの点について「あそびの森」ならではの経験ができたことは、学生にとって大きな収穫である。

みんなで一緒に保育をすることも実習ではできないことである。しかも、その保育について、みんなで一緒に話し合い、子どもの姿、親子のふれあい、親のこと、さらに自分たちが保育した中での問題点等について話し合うことが大きな利点であった。反省をすることで、課題がみえたり、問題点を解決する方法がみつかったりし、それが、今後実践を行っていく上での参考になり、よい学びにつながっていくと思う。

○ 運営について

参加者はできるだけ回数多く参加できるように、予定組数を午前午後それぞれ35組とし、希望回数より1回だけ少なくする（1・2回の人は減らさない）努力をした。継続して来ることによって、仲間ができるようにと考えたからである。そのことが、申し込みの時に、「○さんと一緒にしてほしい」という希望に表れていた。

「あそびの森」に参加している親子にとって、家庭ではできない遊びを経験してほしいという願いで、様々なプログラムを用意した。担当教員が1名減にはなったが、ペーパークラフトを復活させたり、英語遊びやリズム遊びを入れたりと、バラエティを持たせるように考えた。

・今回は初めて外国籍親子（ブラジル人親子）の活動を行った。日本に親しんでほしいとの思いで、日本の伝統的な行事を組み入れたり、日本語に親しんでもらえるような内容を組み入れたりと工夫した。

また、家で眠っていて活用できる物を職員だけでなく学生からも集めて提示し、持って帰っ

てもらうことも行った。参加者はとても喜び、抱えられないほどの品物を持ち帰っていった。

このような活動を組むことも国際化の流れの中で、今後も必要となってくると考える。

○「地域子育てセンター」としての機能について

「あそびの森」も回数を重ねるごとに親たちの親交が深まってきたことがわかる。例えば、申し込みの時に「誰々と同じ時間帯にしてほしい」との希望が増えてきたし、１グループの人数も増加してきていることから推察できる。それだけ､仲間ができてきたようで､親たちの「がやがや会議」が増えてきたように思う。帰るときも、１Ｆの学生ホールで集まって昼食を食べていたり、話し合ったりする姿がよく見られるようになった。

一方、他の親子の様子や接し方を見て､「先生、あーいうふうにするのもありなんですね」と言って来る親もいて、他の親を参考にしているのだなと感じた。親とはどういうものか知らない親が増えてきている現在、他の親子の様子を見る機会も大切な経験と思い､「子育てセンター」としての「あそびの森」の重要性を感じさせられた。

今でもまだ母親一辺倒の育児が多いことを考えると、父親の参加も少しずつだが増えてきていることは、嬉しいことである。さらに、もっと父親が参加したくなるように、内容を考えたいと思う。

○ 教員の学びについて

年度を重ねるごとに、我々教員も様々な学びをしている。「あそびの森」へ参加する子どもの年齢が低くなっていることと、親も若くなってきていること、実際の参加者が予定より少ないことのなどを分析もしながら、プログラムの進行方法、内容、学生の役割等を毎年見直しをしている。

今後も計画・実行・反省・話し合い等をしながらよりよい「あそびの森」を目指して努力したいと思っている

３．おわりに

このように､「あそびの森」を実践してきた結果、学生、参加者親子そして教員にとって実践的な学びの場である「あそびの森」を今後も続けながら、地域の大学として、地域に開かれた｢子育て支援センター｣を充実させたいと思っている。そして、今年度の反省を来年度に活かし、より充実したものにしていきたい。

また、四大の子ども学科が４年目になる来年度には、四大も巻き込みながら、新しい第一歩が進められるように計画・運営をしていきたいと思い、四大子ども学科と短大部幼児教育専攻が話し合いを進めている。今後さらなる発展を夢に描きながら進めていきたい。

最後に「あそびの森」の運営に関わっていただけた多くの方々に感謝いたします。

―児童教育学科　幼児教育専攻―

＜平成20年度「あそびの森」運営の記録＞

◇運営

若杉　雅夫　三羽佐和子　松尾　良克
伊藤　功子　長谷部和子　篠田　美里
杉山喜美恵　生嶌亜樹子

◇事務担当

三羽佐和子　生嶌亜樹子

◇全プログラムの親子名札作成　松尾　良克

◇出席カード製作及び室内装飾　若杉ゼミ生

＜執筆分担＞

若杉　雅夫　はじめに　プログラム①⑨
三羽佐和子　プログラム②⑧　子育て懇話会実践の総括
松尾　良克　プログラム⑦
伊藤　功子　プログラム④
長谷部和子　プログラム⑤
その他のプログラム②③
篠田　美里　プログラム③⑥
杉山喜美恵　その他のプログラム①④⑤⑥
生嶌亜樹子　プログラム⑩

平成２０年度 「あそびの森」プログラム

No	開催日	プログラム	あそびの内容
①	5月24日	スタンプ遊びで 大変身	いろいろな形をペタペタペッタン、大きな紙にスタンプ遊び。できたカラフル模様の紙で、大変身しよう！何ができるかな？ 持ち物・・空き箱やフタなど型押しができるような面白い形の物。絵の具で汚れてもよい服装で
②	6月21日	スライムなどで感触遊びを楽しもう	丸めたり、のばしたり、ちぎったりなどしながら、スライムや小麦粉粘土のべとべと、すべすべ、さらさら感を身体で感じて楽しみます。汚れても良い服装で、手ふきタオルも持ってきて。
③	7月12日	子「くまのプーさん」 を作りましょう。 親：子育て懇話会	ビリビリと紙を破き、ペタペタと糊を付けて、ぺったんぺったんと貼り付けましょう。みんなで大きなプーさんになるまで紙を貼りましょう。 保護者の方は日頃の育児についてワイワイ語り合いましょう。
④	8月30日	親子で遊ぼう 「はいるかなぁ？」	親子でたくさん遊びます。投げたり、受けたり、飛んだり、忙しく動きまわります。 親子とも動きやすい服装でタオル、お茶もあるといいですね。
⑤	9月20日	英語のカルタ取り	A、B、Cから始まる名前の動物を、身体を使ったジェスチャーでマネッコします。そして、アテッコしながら、小さいカルタから始まって「ビッグカルタ」取りをパパやママと取ってみましょう。
⑥	10月11日	わらべうたで、リトミック遊びをしましょう	親子で乗り物や動物になって遊びましょう。歌ったり、ハイハイしたり、跳んだり、走ったりして遊びます。動きやすい服装でおいで下さい。汗が出るので、タオルとお茶があるといいね。
⑦	11月29日	親子で作る ペーパークラフト	インターネットから取り出した紙のおもちゃを、親子で一緒に作って遊びます。はさみとのりを持ってきてね。
⑧	12月20日	クリスマス会	歌、ゲーム、お話など、お姉さんと一緒に一足早いクリスマスを楽しんでみませんか。ツリーも飾りましょう。
⑨	1月24日	粘土遊びで クッキー作り	クッキーの生地を粘土に見たてて、色々な形を作って、お菓子作りを楽しみます。自分だけのオリジナルクッキーが出来るよ。必要なものは、エプロン、バンダナ（三角巾）
⑩	2月14日	子：歌ったり踊ったり しよう 親：子育て懇話会	お姉さんたちと歌ったり踊ったり、お話を聞いたりして、楽しく過ごしましょうね。 保護者の方は子育てについて、専門の先生を交えて楽しく語り合いましょう。
	12月5日 12月12日	ペープサート劇を 観る会	幼稚園、保育所団体別鑑賞会（団体のみ） 団体鑑賞については相談に応じます。

平成 20 年度「あそびの森」参加者数

No	開催日（プログラム）	参　加　者　数				
		組	子ども	親 (母・父・他)	園・施設	合計
【月例プログラム】						
①	5/24（スタンプ遊びで大変身）	44	75	56（44・8・3）		131
②	6/21（感触遊びを楽しもう）	43	72	51（42・10）		123
③	7/12（くまのぷーさん作り）	34	68	39（32・6・1）		107
④	8/30（親子で遊ぼう）	47	68	53（44・7・2）		121
⑤	9/20（英語のカルタ取り）	39	56	39（33・5・1）		95
⑥	10/11（リトミック遊び）	36	57	41（35・3・3）		98
⑦	11/29（親子でつくるﾍﾟｰﾊﾟｰｸﾗﾌﾄ）	39	57	47（39・5・3）		104
⑧	12/20（クリスマス会）	46	73	53（46・5・2）		126
⑨	1/24（クッキー作り）	53	89	60（52・7・1）		149
⑩	2/14（歌ったり踊ったり）	27	47	30（26・4）		77
	合計	408	662	469		1,131
①	11/26（手作りおもちゃ）	36	36	36（36）		72
②	12/10・17（手作りおもちゃ）	50	50	50（50）		100
③	2/26（児童センターとの連携）	25	25	25（25）		50
④	12/8（ちょっと早いｸﾘｽﾏｽ）	10	16	16（9・4・3）		32
⑤	1/18（日本の正月）	8	12	13（5・6・2）		25
⑥	2/8　（節分）	12	21	24（11・11・2）		43
⑦	全７回（ペープサートを観る会）		719	227	7	953
	合計	141	879	391	7	1,275
	総合計	549	1541	860	7	2,406

平成 20 年度「あそびの森」参加者数　子ども 1541 名／保護者 860 名（549 組）園・施設 7 名

総合計 2401 名